



生涯学習センターだより

2026. 1. 14 (水) 2025 年度第 3 号 (1 月号、通巻 45 号)

発行: 秋田県生涯学習センター

令和7年度 秋田県生涯学習・社会教育研究大会 実施レポート

令和7年 11 月 7 日 (金)、秋田県生涯学習センターを会場に、令和7年度秋田県生涯学習・社会教育研究大会が開催されました。県外からの参加者 5 名を含む、生涯学習・社会教育主管課職員、公民館や市民センター等の社会教育関係施設職員、社会教育委員、公民館運営審議会委員、生涯学習奨励員、家庭教育支援関係者、学校教育関係者、社会教育士、社会教育主事有資格者等 84 名が参加しました。全体テーマは次のとおりです。

地域のつながりづくりを支える社会教育の在り方 ～共生社会の実現を目指し、学び続ける人材の育成～

午前は、岩手大学名誉教授 新妻 二男 氏から『新しい「学びの場」としての社会教育施設等の在り方』と題して講演をいただきました。まず、日本の教育制度で学校教育と社会教育が法的に対等であることを確認し、特に公民館や図書館などの社会教育施設の役割を強調されました。これらは単なる貸館ではなく、専門職員が市民の学習を支援・指導する教育施設であることが法律上の位置付けだと説明されました。しかし、現状は多くが貸館機能に留まっており、専門職員を配置している市町村が全体の 4 割程度で「教員のいない学校のように」と強い危機感を示されました。今後の在り方として、SDGs など複雑な課題に対応するため、以下の 3 点が重要と話されました。

- * 多様な機関や人々を連携・協働させるコーディネーター役を果たすこと。
- * 一方的に指導せず、住民や学習者のニーズを丁寧に聞く姿勢をもつこと。
- * 利用者が受容され、安心できる居場所づくりを推進すること。



午後は、当センターの実践研究発表が行われました。実践研究発表は次の 2 つです。

- ①『「熟議」の取り組みと、地域の学びを支える人材の育成』～「協働」を創り出す「熟議」～
- ②『秋田県聴力障害者協会と生涯学習センターとの協働による学びの場の創出』

①は当センターが実践する話し合いの手法「熟議」が、いかに地域の中で協働を生み出すか、成果のあった多数の実践事例を交え、当センター副主幹 (兼) 学習事業チームリーダー 柏木 睦が発表しました。発表では、「熟議」が参加者を否定せず安心して話せる場を提供し、そのプロセス自体が協働に必要な当事者意識を育む点を強調しました。また、「熟議」を重ねることが、地域や集団の中に自然な協働の意識を育むと述べました。さらに、「熟議」を効果的に行う鍵としてファシリテーターの存在を挙げ、その役割と求められる技術 (安心して話せる場の設定と雰囲気づくり、テーマ設定、資料提示等) について解説しました。併せて、当センターの熟議ファシリテーター養成講座の取組も紹介しました。



②は当センター社会教育主事 和泉 洋介が、自身の「秋田市手話奉仕員養成講座」の受講をきっかけに、秋田県聴力障害者協会 (以下、協会) との間で築いた協働関係の構築プロセスを発表しました。講座での出会いから、協会主催の教育フォーラムでのモルック体験会、デフリンピック応援イベントでのブース出展へと発展した経緯を説明しました。また、障害の有無に関わらず共に学ぶ場を創出するため、職員が聴覚障害の疑似体験や手話学習、情報保障の徹底に取り組んだ点を強調しました。この事例は職員の個人的学びが組織における協働へと発展した好事例であり、協会には新しい学びや楽しみを、当センターには共生社会の実現に向けた実践の貴重な機会をもたらした、さらなる協働事業の基盤となっていると締めくくりました。



発表の後はグループ協議を行いました。その中で、「熟議」の目的は模範解答や結論を出すことではなく、参加者が「みんながこんなことを考えている」と感覚的に共有することが大切であり、今回、参加者の思いが十分共有された点が最大の成果であることを確認し、大会全体を振り返りました。

令和7年度 家庭教育支援指導者等研修実施報告（まとめ）

当センターでは、市町村における家庭教育支援チームの中核となるリーダーやサポーターを養成することを目的とし、年間テーマ「地域のつながりで支援の輪を広げ、保護者と子どもをサポートしよう」のもと、全4回の研修を実施しました。

第1回：地域のつながりで家庭教育を支えよう【5月29日（木）】

午前は当センター社会教育主事が、令和6年度の調査結果に基づき、悩みを抱える保護者の現状と支援チームの必要性を説明しました。午後は、助産院こころの院長である小林かおり氏が「ままのいえ」での産後ケアの取組を紹介し、産後うつに触れつつ、個々が始められる「マイパブリック（小さな一歩）」について協議しました。

第2回：保護者と子どもをサポートするために支援チームができることを考えよう【7月10日（木）】

午前、南教育事務所社会教育アドバイザーの沢村正志氏が、挨拶の重要性や家庭でのルール作りの大切さについて講話と演習を行い、午後は八森地区何にもしない合宿実行委員の神垣恭彦氏と、NPO団体にはかむ代表の佐藤存氏が登壇しました。組織づくりより先に「まずやってみる」実践の有効性が共有され、地域での居場所づくりについて学びを深めました。

第3回：家庭での困り感や様々な課題に対応した家庭教育支援を進めよう【9月25日（木）】

午前、高橋大洋氏（子どもたちのインターネット利用について考える研究会事務局）が、子どものネット利用は「遊び」であり、失敗を前提に「困ったら一緒に考える」大人の姿勢が重要であると説かれました。午後は、能代第二中学校教諭の金子豊氏が、発達の特性に応じたオーダーメイドの指導事例を紹介しました。マインドフルネスやゲームを通じたアプローチを参加者が体験し、個別のニーズへの理解を深めました。

第4回：地域のつながりで家庭教育支援の輪を広げよう【11月20日（木）】

午前、秋田大学北秋田分校長の三浦栄一氏が歌を交えながらの講話をされ、人・モノ・コトとの出会いが子どもの成長に不可欠であることを強調し、言葉がもつ力を再確認しました。午後は、当センター社会教育主事によるワークショップを行い、「VUCA」*の時代において、自分自身の「社会関係資本（つながり）」を挙げ、地域の課題解決にどう活かせるかを4ラウンドにわたり協議しました。

※VUCAは、「変動性（Volatility）」「不確実性（Uncertainty）」「複雑性（Complexity）」「曖昧性（Ambiguity）」という4つの要素の頭文字を取った造語です。

第6回あきたWith杯ポッチャ交流大会【12月7日（日）】

障害の有無にかかわらず、誰もが楽しむことができる「ポッチャ」で交流を深めるイベントを実施しました。あきたWith*の共催によるこの大会は6回目を迎え、16チーム、77名が参加しました。コートの縦の長さを短くし、正規のコートよりも小さくすることで、障害のある方から小さな子どもまで、みんなでポッチャを楽しむことができました。会場からは歓声が上がリ、参加者は励まし合ったりしながらゲームが進み、初めて会った参加者同士でも気軽に会話を交わし、一体感が生まれ、会場の様々な場所で笑顔あふれる光景が見られました。楽しい時間を共有し、人と人がつながる喜びを感じることができた交流大会となりました。

※あきたWithは、秋田県生涯学習センターの学習活動の趣旨に賛同した県内企業で設立した非営利任意団体です。



参加者同士で交流を深め、笑顔で写真撮影



狙いを定めて、慎重に投球



仲間と一緒に作戦を考え、相手と真剣勝負しました